近況・所感

最後の〈興安会〉

藤原　作弥

旧満州関係の社団法人にこの〈国際善隣協会〉がある。善隣とはFriendshipの意。戦前の満州や内モンゴルに在住した人々の親睦団体の総本山として、日中両国の過去の歴史だけではなく、将来をも見据えた友好交流の窓口になっている。私は、その他〈興安会〉〈蘭星興安会〉〈興安学友会〉などの幹事を務めている。また、毎年〈安東会〉にも出席している。このことは、戦前昭和における私の満州体験の足跡でもある。

〈興安会〉とは、五族協和を標榜した満州帝国を構成する五つの民族の一つ、モンゴル族の居住・行政地域「興安総省」に居住していた人々の集まり。毎年11月3日、東京・目黒の天恩山・五百羅漢寺で総会が開かれる。わが家は同省の省都、ホルチン右翼前旗の興安街、中国名・王爺廟、現・中国内モンゴル自治区ウランホト市にあった。

父は満州国軍のモンゴル人部隊の幹部を養成する興安軍官学校（陸軍士官学校）で「日本語・日本学」を講ずる教官（文官）だった。その傍ら、モンゴルのシャーマニズム研究のためモンゴル人のゲル（包）を訪ねてのフィールドワークに余念がなかった。〈蘭星興安会〉とは同軍官学校関係者の集まりである。

〈安東会〉に属しているのは、昭和20年8月、ソ連戦車軍団がソ満国境を越え侵攻してきた際に興安街を脱出して南満州の国境の町・安東（現・丹東）に逃れ、翌年末、日本に引き揚げてくるまでの約1年間、難民生活を送った〝地縁〟からである。

日本では幸い、仙台の実家が戦災を免れたので、〝内地〟の子どもたちと同様、復旧→復興→安定→成長→高度成長……の豊かな生活を享受。その後、飽食の時代からバブル生成・崩壊に至るまで、経済ジャーナリストとして日本の発展を伴走取材してきた。その間、何冊か本を書いたが、『満州　少国民の戦記』『満州の風』『李香蘭　私の半生』など〝満州物〟が多いのは、ソ連侵攻から難民引き揚げまでの戦争体験を記録として残すことが、歴史の語り部たるジャーナリストの責務と考えたからである。

執筆の直接のきっかけは、敗戦時3年生だった「興安在満国民学校」の同窓会〈興安学友会〉との出会いだった。そこで再会した同窓生の情報で、学友を含む同胞約1200名が興安街郊外のラマ教大寺院近くの草原でソ連戦車軍団に大量虐殺された〈葛根廟事件〉の犠牲となった事実を知り、大きな衝撃を受けた。以来、毎年8月14日の祥月命日に五百羅漢寺で開かれる〈葛根廟事件・命日会〉にも出席している。

近年、旧満州関係の〈会〉は、物故者と老齢者が増えたため解散する事例が散見されるが、〝満州モンゴル〟全域をカバーする〈興安会〉もこのほど、60年の幕を閉じた。誠に残念だが、人間は自分が生きる〈時代〉と〈場所〉にいつかは別れを告げなければならない。しかし、その人間が生きた〈時代〉と〈場所〉は、〈歴史〉として継承されていく。

生ある限り、その語り部であり続けたい。

（会員・理事）